

塩津港遺跡出土の船板に使われていた「マキハダ」について

平成 27 年（2015）に塩津港遺跡(滋賀県長浜市)から出土した船板（平成 27 年 12 月 8 日記者発表）の調査を進めたところ、水漏れを防ぐために縄状のもの「マキハダ（槓肌/槓皮）（マイハダとも言う）」が詰められていることを確認しました。

出土した大型の板材は船板を継ぎ合わせるための独特の技術「縫い釘」が使われた釘穴が残されていたため、船材と判断されたものです。この船板を現地から引き揚げたところ、内側は腐食し、中央で縦に割れた状態となっていました。この腐りや割れは船であったときにすでに生じていたものと考えられます。そして割れ目から水漏れが発生したものと考えられます。その水漏れを止めるために詰められたと考えられる、直径 1 cm 程度の縄状のもの（マキハダ）を約 1 m にわたって割れ目に押し込むように充填させていました。

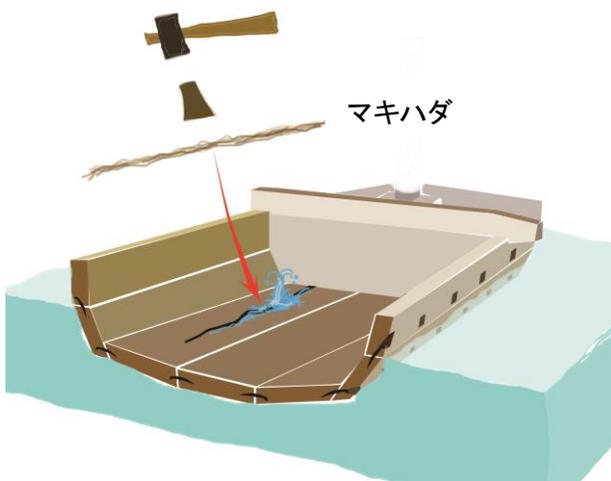
マキハダとはヒノキなどの樹皮を叩いて繊維状にしたもので、水漏れを防ぐための充填剤として隙間に詰め込んで使われたものです。船や桶などを組み立てるときに接合部に使われました。長い繊維状のまま詰め込む場合もあれば、出土品と同じように縄状に結ったものも使われます。また、今回の出土例と同じく補修に詰め込まれることもありました。

今回の出土品は 12 世紀代の最古の「板作りの構造船」の部材とされるものに使われていたマ



キハダです。マキハダは、構造船を作るうえでの必須技術です。発掘調査によって出土した例は今回が初めてで、また、最古のマキハダ資料ともなります。

【船板に充填されたマキハダ：左】
中央の割れ目に沿って充填されているのが「マキハダ」です。縄状のものが約 1 m にわたって充填されています。



【マキハダの使用例：左】
割れが生じて水漏れが発生したところにマキハダをへら状の工具を使って打ち込みます。